
不死の騎士と歌姫が、夢見た世界の果て…

川風 未祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死の騎士と歌姫が、夢見た世界の果て…

【Nコード】

N4531Z

【作者名】

川風 未祐

【あらすじ】

人間でありながら魔王配下に就くブラッドは、ある事件をきっかけに魔王を殺害するが、その代償は大きく『不老不死』の呪いを受ける事になる…。

魔王との戦いで傷を負った彼を助けた奴隷の少女 シルヴィアとの出会い、そして別れから5年後に2人は再会を果たす事になる。魔族との戦いを通して明かされるシルヴィアの秘密、そして今は亡き恋人が残した希望の光が照らし出す先に待つものとは…そして不老不死の呪いを解く方法は存在するのか？

プロローグ『少年と騎士』

不老不死

それは決して老いる事なく、死ぬ事がない永遠の命

幾多の権力者はさぞかし、その力が欲しかったに違いないだろう

彼らだけでなく、誰もが一度は夢見た事であろう：

だが、本当にそれは幸せなのだろうか？

愛する者に先立たれ、永遠に老いず歳も取らずに生き続ける事に、意味があるのだろうか？

自分だけが世界に1人ぼっち…。

1人だけ取残された時に、人は何を思い、何を感じるのだろうか。

欲しくて手にしたわけではない呪いの力を前に、ただ抵抗できないでいる無力な自分

しかし…いずれその力の意味を知る時がくると信じて…。

空を覆う黒い雲、太陽の光は一切届かない草原だった場所がそこには広がっている。

地面に転がる無数の屍、折れた剣先に、地面に突き刺さる無数の武器がここで行われた事を物語る。

山になった屍を呆然と眺める人ではない姿をした者、その背中からは紫色の翼にごつごつした身体をして、額から飛び出た角が特徴的な魔物の姿、人間と相反する魔族の中でも下級に該当するのが、この魔物と呼ばれる異形の姿の者達だ。

「一体どういうことだ、話すと違うじゃねえかよ」

魔物は屍に背を向けると、自分の方を睨む様に立ち尽くす少年を見る。

その身体は泥と返り血で濡れ、あちこちに無数の傷があり、右手に持った剣の刃先には切り落とした魔物の血だろうか、真っ赤に染まっている。

少年のその鋭い眼光の先には今：目の前に立つ魔物だけが映っている、迷いのない瞳はどこか冷たい感じを受け、恐怖と言葉はこの少年の中にはないのだろう。

「こんなガキ1人に俺様の部隊が殲滅させられるなんて：お前一体なんなんだよ」

「……。」

「だんまりかよ、後悔するんだな俺様を敵に回した事を死んで後悔し……」

胴体から頭が離れるのに時間はいらない、鮮血が勢いよく噴出し

頭は空高い舞い上がり、残された胴体部分はゆっくりと地面に倒れ伏せる、鈍い音と共に泥がはね少年の足元に飛び散る、同時に少年の持っていた剣先が折れ地に突き刺さる。

剣を持った右腕をだらんと下げ、空を見上げる少年の頬を降り始めた雨が滴る、瞳を閉じてその場に少し立ち尽くす、そこへ近づいてくる足音に気が付く

「これほどの数の魔物を1人で倒すとは、なかなか見ごたえがあった戦いぶりだ、しかしまだ若いゆえに世界を知らなすぎるな」

現れたのはそこらにいる魔物とは違う、全身を黒い鎧で身なりを固めた人物、外見からでは男か女かの判断はできないが、声から男と判断できる、騎士らしい風貌に似合わない巨大な斧を軽々と片手で持つ、その姿は見るものを圧倒させる、しかし少年は顔色一つ変えない。

ふと顔を覆ったマスクの中で笑う

「何がおかしい」

「ここにお前の求める死に場所はない、その迷いのない瞳の先にあるのは死への執着だ、なぜそこまで死にこだわるのか、俺には理解不能だな」

先に動いたのは騎士の男だが、肝心の巨大な斧は地面に突き立て丸腰のまま、少年はその場で剣を構え騎士の動きを見る、自分の間合いに入った一瞬の隙を逃すことなく、剣を振るうが軽く避けられる、騎士は足払いするや少年の体制を崩すと同時に、胸倉を摘みそのまま地面に叩きつける、鈍い音と少年が小さなうめき声を上げる、次の攻撃に備えすぐに退避しようとするが、激しい胸の痛みに動き

は鈍る、騎士は容赦なく少年の持っていた剣をとるや、背中を斬り付け足で蹴り飛ばす

「がはっ」

地面に横たわる少年、その場で血を吐くや激しく咳き込む、手で口の血を拭いながら男を睨みつける

「まだ、戦うつもりか？ やめとけ本当に死ぬぞ、悪い事は言わないからその辺でやめておけ」

「…うるさい…黙れ、俺は…」

地面に力強く手を着き立ち上がる、激しい呼吸のせいか肩が大きく震える、近くに落ちていた剣を拾い上げ再び男の元へと駆ける、少年の振った剣は男の右頬を掠める、男に一撃を与えるのを確認すると、ゆっくりとその場に倒れる少年を、大きな腕で抱き抱える男

「次にこうして戦う時がくる時…俺はどんな顔でお前と戦うのだろう…」

雨が上がり黒い雲の合い間から、一筋の光が差し込む

その光の先が照らすのは…。

第1話『赤い死神』

険しい山道を全速力で駆け下りていく2人の男、目の前に迫る枝を掻き分け、足場の悪い道を突き進む、体格の良い男は走りながら何度も後ろを振り返る

「はあ、はあ！どうだ来てるか、奴等は…」

「…いや、来てないみたいだ、どうやら逃げ切れたみたいだな」

横を走る小柄な男は、隣の男の言葉を聞いて安心したのか、歩を緩め近くの木の幹に座り込む、大柄の男も息を切らしながら、転がるように座り込むがキョロキョロと辺りを見渡す。

「そろそろ行くぞ、あいつらに見つかる前に少しでもここから離れないとな」

「…おい、何かこっちに来るぞ」

男達の隠れる場所に近づいてくる音に身体を寄せ合う男2人、口を手で押さえ息を押し殺す。

ゆっくと音をする方を見る男の目に映ったのは、ボロボロの布を羽織った人影だけしか見えない、太陽の光が届かない深い森の中、相手が人間なのかを確認出来ない限り、ここから出ることは危険すぎると判断した男達は、相手が通り過ぎるのを待つことにしたのだが、事態は急変する事となる。

森全体を霧が包み込む

「やばい、奴等だ！逃げるぞ相棒！」

男2人は立ち上がり、森を降りる道へと再び出ると走り始めるが、彼らの前にドラゴンが現れる。

ドラゴンは大きな目をグルグルと動かし、男達に焦点を定め雄たけびを上げる、耳の鼓膜が破れんばかりの巨大な雄たけびに、足がすくんでしまい動けない男達を前に、ドラゴンは低い声で言い放つ

「見つけたぞ、人間共が：縄張りから逃げられると思っていたのか？我等の縄張りに足を踏み入れた事を後悔しながら、苦しまずに殺してくれるわ」

ドラゴンは大きな口をあけるや、身体に似合わない素早さで小柄な男の横を通過すると同時に大柄の男を捕らえ、その鋭いつめでバラバラにしてしまう、小柄な男は目の前の惨劇を前に、声も出せないまま自分の番を待つだけの状態

「あ、あ」

バラバラにした肉片を食べ終わるや、小柄な男を見るや口元をほころばせ向かってくる、思わず目を閉じる男だがゆっくりと目を開けると、ドラゴンの攻撃を剣1本で受け止める人影というよりも、青年の姿がそこにはあった。

短髪の黒髪に赤い瞳の青年は、巨大なドラゴンの攻撃を軽々と剣1本で受け止める、いきなり剣から手を離すや男を抱えその場から離れる、力いっぱい体重をかけていたドラゴンは、抑えがなくなつたせいで体制を崩し、その場に倒れると青年は男をその場に残し、地面に転がった剣を取り戻すとゆっくりと立ち上がるドラゴンの前に、立ちふさがる

「人間ごときが、なめやがって死ね」

鋭い爪が青年の右腕を掠める、裂かれた服の間から覗かせる黒い刺青を見るとドラゴンの目の色が変わる、その一瞬の隙を見逃すことなく、青年は剣を構え直し一気に間合いを詰めると、その鋭い爪を持つ腕ではなく、巨大な目を切りつけるとそれ以上は攻撃をせずに、男の元へ駆け寄り

「今のうちに、ここから逃げて森を抜けてください。」

「あんた…一体」

「早く、やつの動きが鈍ってる今のうちに」

「わかった、あんた名前はなんてんだ、俺はベンだ」

ベンと名乗った男は青年に手を差し伸べる、差し出された手を握ると青年は少しぎこちない笑みを浮かべ

「ブラッド…」

「ブラッドか…生きてまた会おう」

ベンは笑顔で返すと一目散に走り出す。

ブラッドはベンが立ち去ったのを確認すると、剣を持ちドラゴンの元へと向かう、その表情は先程とはうって変わり、冷たい表情へと変わる。

冷酷な瞳に映るのは目の前に立ちふさがる敵のみ…

ドラゴンは潰された片目を押さえながら、ブラッドを睨みつけると口から焰を吐き出すと同時に大爆発する、爆風で周りの視界が失われるのに時間は要らない、周りの気配に全神経を集中しながら、ド

ラゴンの攻撃に備える。

煙の中から鋭い爪がブラッドを襲う、間一髪で攻撃を剣で受け止めるが、その重さの違いに気が付いた時だ、背後から気配を感じ振り返る

「かかったな小僧、これで終わりにしてやる」

振り返った時はすでに一步遅く、煙の中からドラゴンの頭が出て素早い動きで突っ込んでくる、避けようとしたが後ろに木があり逃げ場がなくなった、鋭い牙がブラッドの腹部を裂く、腹部を押さえながらその場に膝着くと思いきや、ブラッドは膝着くどころかドラゴンのど元に剣先を向ける

「貴様、なぜ死なない」

ブラッドは口から血を吐き出す、ドラゴンはさっき服の合い間から見た刺青に気が付く、それはドクロに蛇がまとわりつくような奇妙な刺青

「まさかお前、赤いしに…」

言葉の途中でドラゴンはそのまま倒れる、返り血がブラッドの顔に飛ぶ

「赤い死神のブラッド…過去の名前だ…」

先程までの霧がすっと晴れていく。

森を降りる途中で、川を見つけると返り血を浴びた顔を洗う、川に映った自分の顔を見てブラッドは少し暗い表情を浮かべる、今居る場所は先程の場所とは違い、木々の間から微かな木漏れ日が覗かせる、それはどこか神秘的な光景といえる。

「消せない過去…か…」

ブラッドは顔を布で拭き、再び道に戻り歩き出す。

かつて魔界の王をその手にかけて人間がいたといわれる、人間でありながら魔族の仲間となったが、裏切り魔王を殺す結果となる、その時に魔王が最後の魔力を使い人間に呪いをかける…

それは決して老いる事なく、死ぬ事を許されない呪い

『不老不死』

魔界と人間界との間にその名をとどろかせた者は、赤い死神・あるいは神殺しのブラッドの名で、世に広まるが彼を見たものは居ない、彼を見たら最後…それは死ぬ時だからだ。

第2話『約束』

小さな村の中心部には色々な露天商が軒並み揃える。

結い上げた長い髪が歩くたびに左右に流れる、黒い衣装に身を包んだ青年は、ある店の前で歩を止める。

彼の目に留まったのは、綺麗な輝きを放つ星型のペンダント、店の主人らしき男はすぐに店先に出てくる

「なかなかいいでしょ、今日入った物なんだけどこれだけは一点ものなんだよ、よかったらどうだい…安くしておくけど」

青年は微かな笑みを浮かべると、代金を店の主人に手渡す

「毎度、きつと喜ぶに違いないよ…もうこんな時間か」

「えっ」

「今日も夕日が綺麗だな、さて今日はここで店じまいするかな、じゃあ兄さん気をつけてな」

「ありがとう」

青年は店主に別れを告げて、商店街の中を進んで行く。

両サイドの店は店じまいの準備を始めている、空は赤く染まり始め、太陽が沈み始めていた、その様子を少し立ち止まって見ている。

彼の横を子供達が駆けていく、何処の家の子供達も家に帰る時間らしい、後ろ姿を見送りながら再び歩き出す。

どれほど歩いたか、彼が向かう先には村を見下ろせる丘が見えてきた、ふと後ろを振り返ると村の商店街の通りが丸見えだった、さつきまで自分が歩いていた道は、なんて小さく見えるのだろうか…。丘へと続く階段が上がった先、最初に目に就くのは木のベンチ、その他には何も無い少し殺風景な場所だが、彼にとっては憩いの場所であるのに違いない。

木のベンチに座っているのは少し小柄な少女が1人だけ、青年はゆっくりとした足取りで彼女の隣に座る

「ルース…」

名前を呼ばれた少女は、青年の顔を見ると笑顔で言葉を返す

「お帰りなさい…」

横に座った青年にもたれかかるルースは夕日を見つめながら、青年の手を握ると青年もルースの手を握り返す、その行動に2人は突然笑い始める、青年はさつき店で買ったペンダントをルースの首にかけると、ルースはペンダントを見て目を光らせる

「きれい…ねえ」

「ん」

「この間の約束…ちゃんと覚えてる」

「ああ、わかってる」

「…」

ルースは突然黙りこんでしまい、青年は突然の異変に立ち上がり彼女の前にしゃがみ込み、大丈夫かと声をかけた時だった、彼女が口を開き言葉を発する

「…約束……守ってくれないから…私は…お前のせいで…」

がっつと青年の腕を掴む、掴まれた瞬間に腕に違和感を覚える、血に塗れたその腕の先に見たものは血だらけのルースの姿、そして激しい爆発音と共に聞こえる人々の悲鳴が、空に舞い上がる。後ろを振り返るとそこには、燃え盛る家々に逃げ惑う人々の姿

「あ…これは一体…」

「お前のせいさ…全て…」

「……………じょうぶ……………ですか？」

「っー!!」

目の前に心配そうにブラッドを見つめる少女の姿、それはさっきの少女とは別なのは一目瞭然だった、目の前の少女と言うよりも女性と呼ぶほうが相応しい。

「大丈夫ですか？ずいぶんとうなされていたみたいですけど…」

心配そうにブラッドの顔を覗き込む女性に、思わず頬を赤くするや下をみてしまうブラッドに女性はくすっと笑みを浮かべる、女性はブラッドから車窓からの景色に目を向ける、ブラッドも思わず外の景色に目を向ける、目の前に広がる草原地帯の先に見える町の姿を見て少し落ち着きを取り戻すブラッド、あのドラゴンを倒したのちギルド依頼の報酬をもらう為に、大きな町に行く必要があった為に、この汽車に乗ったのであった。

魔物が数多く存在するこの世界にギルドは必要不可欠の存在であった、魔物退治からお遣いまで何でも請け負い、ギルドに所属する者達にその仕事を仲介する、報酬は各地にあるギルドであればどこでもokであり、所属する者とギルドマスターには絶対の信頼関係がある為に、誰も不正をする事はない。

無論：ブラッドもそんなギルドの一員である為に、ドラゴン退治の報酬をもらう必要があるのです、それで生計を立てている。

「あの：一度どこかでお会いしてませんか？」

いきなりの女性の言葉にブラッドは耳を失う、目の前の女性はいきなり初対面のブラッドに対して：ブラッドは過去の記憶をさかのぼるが該当する者がいない、というよりもいる訳がないだろうという顔をして、1人で納得する。

「人違いじゃないかな：」

「ですよね」

和やかな雰囲気では話は終わるのだが、ブラッドはあるものに目が

留まる、その視線に気がついた女性は首にかけたペンダントを手をかける

「昔、命を救ってくれた方からもらった大切なものなんです…そして今もその人の行方を捜してますけど…でも5年も経ってるからもう会えないかなって…少し諦めてますけど」

「見つかるといいですね」

「ありがとう。」

汽車はゆっくりと速度を落とし始める、そしてアナウンスが流れる

『次は終着駅のボログル・ボログル…お忘れ物がないようにお気を付けて』

汽車はゆっくりと止まり、中にいた乗客が一斉に汽車から降りていく中、女性とブラッドは一緒に汽車を降りるや、女性はブラッドに別れを告げる

「それじゃあ、私はここで…また会えるといいですね」

そういつて、笑顔を浮かべるとさっと彼の前から走って去っていく、その後ろ姿を見送るブラッドは汽車から降りて町に向かう人の中に消える。

遠い日の約束…戻れない過去の過ち

第3話『千年祭の町 ポログル』

汽車を降りて最初に目についた物は、巨大な看板がデカデカとそびえ立っていた。

《ようこそ千年祭の町ポログルへ》

町の入り口を入ると、沢山の屋台が並び人々が準備をしていた、その様子を見つめブラッドの表情はどこか浮かない。

ずっと戦いの中で、生きてきた彼にとっては人生はずっと戦いでしかないのだ。

「この町に長いするつもりもないし、すぐに用事を済ませ、ここを出よう」

ふと、さっき出会った女性の事を思い出すが、やはり会った記憶がない、しかし彼女が身に着けていたペンダントには思い当たる事はある、だかあれから随分と年数が経過している、ブラッドにとって時間はあつという間に、過ぎていく。

大抵のギルドは酒場の中に一緒にある、なぜならば旅人が酒場に集まり、情報交換をする場所だからこそ、ギルドはそういった所にある、そして宿屋も一緒という所もあるが、ここは残念ながら宿屋は別になる。

酒場の入り口の扉を開ける、そこは見慣れた汚いバーカウンターに、ボロボロのテーブル、そしてマスターが愛して止まない、アイドルのポスターが貼ってある、色あせて今にも剥がれ落ちそうな、ビンテージ物というべき代物だ。

マスターは扉の開く音で顔を挙げる、同じように昼間から酒を浴びる男4人も、一緒にブラッドを見るや、皆は口々に声を掛ける。

「ブラッドじゃねえか、最近見ないから俺はてっきり、魔物に喰われたかと…」

「何、阿呆な事言ってるやがる」

「相変わらず、笑わないなお前は」

「でも、無事に帰って来たからいいじゃねえのよ」

酒が入ってるせいか、大盛り上がりの面々、ブラッドはマスターの前に座ると、ドラゴン退治のギルド依頼書を出す。

「流石だよ、ここまで噂はきてるよ、ほら…約束の報酬だ、また宜しく頼むぜ」

「そういえば、マスターさっきのチラシだけど、ブラッドにも見せてやれよー」

男の言葉にマスターはカウンターの下から、一枚の紙を取り出す、それを無造作にブラッドに渡す。そこには、あの汽車で出会った女性の姿があり、名前を見て驚きの表情を浮かべる。

「だから言っただろ、あんまりにも可愛いから、流石のブラッドも驚くって」

「あゝも、うるさい黙ってる」

マスターは空き瓶を男達に投げつけ、彼等を黙らせる。

「明日の千年祭のイベントで歌を歌うらしい、たまには少し気分変えて、明日だけは祭りに行つてこいよ」

それから、少し話をしながらブラッドは飲み慣れない酒を飲み、カウンターに置かれたポスターに写る女性を見る、その様子にマスターはコップに水を入れ出す

「何かあったか？顔色悪いぜ…」

「…昔の嫌な事…思い出したただけだよ、なんでもない…」

「…俺は別にお前の過去を聞くつもりはないがよ、あんまり自分を責めんな」

そう呟くマスターは、とっくに酔いつぶれて男達を、叩き起こし

「もう今日は終わりだ、さっさと帰って自分の家で寝ろ！」

「マスターそんな、俺達まだ飲めるよお」

「あゝも、うるせい…酔っ払い共が、また明日来い！」

夜道を一人歩くブラッドは、空に散らばる星を見つめる、手を伸ばせば手に入れる事が出来る、そんな気がしていた。

同じ頃

宿屋の窓から星を眺める女性

「…人違い…でもあれは…」

首から下げたペンダントを、夜空に向けるとペンダントは光を反射させ、一段と違う輝きを映し出す。

第4話『再会』

千年祭の町に朝がやってきた。

早朝から鳴り響く爆竹音が、祭りの開始を教える、町中の人々は今日の為におめかし、きれいな服に身を包み込み、記念日を楽しむ。祭りという事もあり、沢山の人々が駅の方から歩いて来る、中には馬車から降りてくる、どこかの高貴な伯爵とその婦人が、煌びやかな衣装を来て、祭りを見学する。

「はあ…」

その中、ブラッドは違っていた、広場に設けられたベンチに腰掛け、どこか浮かない顔をする。心の底から楽しめないでいる、というよりも…楽しみ方を知らないからこそ、困惑していた。

早朝、爆竹音で目が覚めたブラッドが、ギルドへ向かう

扉には一枚の張り紙が貼られ、鍵が掛かり

《本日は千年祭の為、ギルドは休みになります、明日からは通常通り、なお…酒場は夕方より営業致します。》

成す術なく結局、祭りに赴く事となる。

そして今に至る。

溜め息ばかりが出る、自分はこんな所で一体何をしているんだろうと、自問自答する。

「あはは、行くぞ」

「待ってよ」

通りの方から子供が数人、風船を持ち広場の方に駆けてくる、最後尾にいた女の子が、つまずきその場に倒れこんでしまう。

ゆっくりと立ち上がろうとした時だ、馬車に繋がれた馬が、意気なり暴れ馬と化し、広場の方に全速力で走って来る、その前には子供がいる。

助けに向かう誰よりも先に、ブラッドが駆ける。

前に腕を延ばし、加速した勢いで思い切り地面を蹴り、飛び込む様な体勢で、しっかり女の子を抱きかかえ、地面に背中から着地するが、着地場所が少し悪く壁に頭を強打する。

地面を擦る音と同時に馬は、広場へ駆けて行った、人々は硬直したまま、目の前で今起こった事を整理する。

「おい…大丈夫か！」

駆け寄る人の群れ、ちょうどそこへ彼女が通りかかる。

「何かあったんですか？」

「ああ、馬が暴れて子供がひかれそうになったのを、あの青年が間

一髪助けたのさ」

子供の母親が何度も感謝の言葉を掛ける、ブラッドは掠めた傷口を右手で抑えながら、話しをしていた。

その時、右手の甲に巻いていた布がひらりと地面に落ちる、布は彼女の足元に

「…」

彼女の瞳に写る、ブラッドの右手の甲には、まるで何か隠す様に焼き潰された痕があり、その周りには蛇の身体のような模様が見てとれる。

「間違い…ない」

布を拾い上げ、ブラッドの元へ歩き出す。

「本当にありがとうございます」

深く頭を下げ、子共の手を引き帰って行くのを見送るのも束の間、意気なり右腕を掴まれる。

振り返るとそこには、あの汽車で出会い、酒場で見たポスターの女性、再びブラッドの前に姿を見せる、あの時はまじまじと見なかったが、青色の髪を珊瑚の髪飾りでまとめ、澄んだ緑色の瞳でブラッドをじっと見つめる。じっと見つめられ言葉が見つからないままのブラッドに対して

「やっぱり、どこかで一度会ってますよね、この右手の甲の火傷は…」

次の言葉が出てこない女性、ブラッドは何も言わないで黙って次の言葉を待つ、女性が言葉を発しようとした時だ、後方で大きな音がして思わずブラッドの腕を離し、両耳に手を当てる。

その一瞬の隙について

「悪い…。」

横をすり抜けるように走り去るブラッドは、広場の中の人ごみの中に紛れ込んでしまう。その後をすぐに追いかけるが見失う、知らず知らずに入り込んだ路地裏の通りは薄気味悪く、しかしこの先に居るかもしれないと感じ、ゆっくりとした足取りで進んで行く。

路地を進んだ先、今は廃墟となった建物の中に身を潜めるブラッド、壁に寄りかかり肩で息をする

「はあ、はあ、はあ、はあ…何でこんな形で再会するんだ」

黒ずんだ天井を見つめ、遠い日の記憶を呼び戻す…5年前の彼女との出会いを…。

第5話『魔王ハデスの死と、シルヴィアとの出会い』

魔界：そこは全てが闇に包まれた世界、そこには魔族と呼ばれる者と彼らを支配する魔王が存在する。

黒い霧に覆われ、死肉をむさぼる魔物の群れは、ハイエナのように常に餓えており獲物を探す。

そこはまるで地獄と呼ぶに相応しい、世界の最後の姿とも言えるだろう…。

魔界の中心部に空いた巨大なクレーターらしき穴の中に、魔王が君臨する城が存在する、そこを出入りするのは高貴な魔族と魔王ハデスの忠実な配下のみが許される、許可無き物はたとえ高貴な者であろうが、容赦なく切り殺され、魔物の餌とされる。

この世界は強い者だけが生き残れる世界…

魔王城へと続く長い階段を上っていく青年の姿、その手には敵の返り血で真っ赤に染まった大鎌を持ち、右手の甲には魔王ハデス直属の7将軍と呼ばれる者達に与えられた刻印、入口を守る衛兵は彼を見るや、少し緊張したのか動きが鈍る。

青年は魔王城の重い鉄の扉を見上げる、その表情はどこか冷たく

「どうぞ、お入り下さい」

青年は入ると同時に扉を閉めようとした時だ、陽気な声が城内から聞こえる

「おっと、出るからまだ閉めないでくれよ！」

城内から出てきたのは金髪の髪をさつと手で払いながら、軽い足取りで出てきた青年が1人、衛兵はまたも緊張したのか動きが鈍る、金髪の青年は入口に立つもう1人の青年に向かい軽快に挨拶する

「何だ、誰かと思ったらブラッドじゃないか：相変わらず怖い顔して、そんなんじゃないつまで経ってもモテないぜ、まあ僕には関係ない話か！じゃあ僕は、これから大事な任務なんで」

そういつて出て行く、ブラッドは無言のまま城の中に足を踏み入れる、2人の出入りが終わるや衛兵は扉を閉める、衛兵は扉を閉めると緊張が解けたのか大きく深呼吸する

「まさか赤い死神と、青い貴公子に会うなんて…」

人間でありながら魔王配下に就くブラッドは、魔將軍の位まで登りつめ、今や彼の名を知らない者はおらず、彼が出る戦場に残るのは屍の山のみ、冷酷で普段から感情を出さないブラッドについた通り名は『赤い死神のブラッド』相手が誰であろうと彼にとっては全てが敵なのだ…。

自ら望んだ生き方をいままら変えるつもりはなく、戦いの中だけに生きて、価値を見出す事しか出来ないまま、いったい何年の月日が過ぎたのだろうか…。

ブラッドは赤い絨毯が敷かれた長い廊下を突き進む、すれ違う者は誰一人いないまま通路を進んだ先に、最初の入口にいた衛兵とは、強さが違うであろう衛兵が2名、扉の前で剣を持ち扉を守る、衛兵の1人がこちらにやってくるブラッドに気が付くや

「大変申し訳ございませんが、ここより先はハデス様の許可がない者

を、お通しすることは禁止されております、例えそれが魔將軍のブラッド様でも：例外はござ：」

すべに衛兵は息絶えて、鈍い音と共に床に転がる衛兵2名の頭、体はゆっくりと倒れ、鎧が地面に当たる音が、廊下全体に響き渡るのを聞く前に、扉を開け放ち中に入るブラッド

部屋に入るや、外から扉を開けられないように鍵を掛ける。

「随分と騒がしい挨拶だな、ブラッドよ」

部屋の奥に悠々と腰かける骸骨の姿をした魔王ハデス、その表情は何かを悟っている表情、ブラッドは大鎌を振り上げる、そして鎌を魔王ハデスに向ける、その瞳の奥に燃える復讐心

「何の真似だ、私にその鎌を向ける事が何を意味するのか、お前はわかってるはだ：」

「ああ、知ってるさ：裏切りさ」

「ならば、なぜ」

「復讐だ、なぜあいつを殺す必要があった」

ハデスは気味の悪い笑みを浮かべると、ブラッドの方を見て

「あの娘なんという名だったかな、あれはお前にとっては unnecessary 物：だから壊したのだ」

「：殺してやる：ここで今すぐ殺してやる：」

ブラッドは鎌を握りなおし、ハデスに向かって行くが、相手は魔界最強の魔王と謳われる者、生半可な力では及ばないのは承知してい

たつもりでいたが、戦いの経験が違いすぎる。

攻撃を軽々と交わし、ブラッドの一瞬の隙をつき時空から出した剣を振り下ろす、間一髪で攻撃を避けるが、ハデスはそこまで先の行動を予測した上で、次の攻撃を繰り返すといとも簡単に、バランスを崩すブラッド

「！」

一撃を入れる。

紙一重で攻撃を避けたつもりだが、衝撃波で吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「自分から戦いを挑んだ分際で、この様か…もう少し愉しませてくれよ」

剣を振り上げるハデスは力一杯に振り降ろす、鎌で剣を受け止めるがやはり相手は魔王、力もパワーも断然違う

バキン

鎌は真っ二つに折れ、折れると同時に剣はブラッドの肩を切り裂く、鎌で受け止めた為に多少の力を吸収した事もあり、致命傷は避けたものの傷口が深いのは間違いなかった、溢れ出す血を手で押さえるが止めることは出来ない

「無駄だ、私の剣は呪われし魔剣という事を忘れたのか、いずれその傷口から毒が回り貴様はその女の跡を追って死ぬのだ」

「いや、あんたも一緒に道連れだ…俺1人だけで地獄には行かない、お前も一緒に連れていく」

「無駄な事」

ゆっくりと立ち上がるブラッドは折れた鎌を拾い上げ、何を考えたのか鎌をハデスに向かって投げる、そんな適当な攻撃が当たるはずはなく、軽々と避けるハデスにブラッドは一瞬だけ口元を緩める、それに気が付いたハデス

「何がおかしい、おかしくなったか」

「いや、俺は正常さ…戦いは終りだよ…あんたの負けだ」

突然ハデスの身体が光始まる、自分の身に起った異変にすぐに気が付いたハデスは、王座の後ろに設置された水晶に目をやると、先程ブラッドが投げた折れた鎌が突き刺さり、水晶にヒビが入る

「貴様…なぜあれの存在を…」

「用心なあんたの性格だ、自分の一番大事な物を危険な所に置かない、とくに命の源の心臓はな…終りだよ、俺もあんたも一緒に地獄行きだ」

「ふははははははは、これは傑作だ」

ハデスは突然高笑いを始めるや、消え始める身体のままブラッドに向かってくる、攻撃に備えるが水晶が砕けると同時に塵となり吹き飛ぶが、吹き飛ぶと同時に黒い風がブラッドの身体をすり抜ける

「ぐうっ」

胸を締め付けるような痛みを覚えその場に倒れ伏せるブラッド、部屋中にこだまするハデスの声

『貴様には決して解ける事のない呪いを与えよう、愛する者の待つ』

世界に決して行くことが出来ない呪い、決して老いる事なく死ぬ事がない、不老不死の呪いよ：せいぜい私に反旗を翻した事を後悔しながら生きるが良い、若造よ』

川辺近くに身を潜める少女、その手には手枷をつけられて、自由を奪われ奴隷として生きる事を虐げられた、しかし少女は自由という道を選び逃げたのだ。追っ手に見つからないように、身を隠しながら進む少女は川岸に倒れるブラッドを見つける

「あ、あの：大丈夫ですか：」

恐る恐る声を掛けるが返答がない、ただ微かに息をしているのを確認すると、少しほっとした表情を浮かべる、怪我をしている事に気が付くと辺りをキョロキョロとして、一度その場から離れる。

どれほど時間が経った頃だろうか、両手一杯に薬草を持ち戻ってくると、近くに落ちていた石ころを使い、薬草をすり潰すと、すぐに傷口に塗り始める。

「ううっ…」

少女がブラッドを見つけから三日、未だに目を覚まさないまま、悪い夢でも見ているのか、呼吸が荒い時もあり、一時も離れずに看

病を続ける。

ブラッドはまるで死んでるかのように眠っている、傍に座り看病する少女はブラッドの頬に手を当てる

「あったかい…」

少女の手が触れて、少しして

「……」

「気が付きましたか」

はっと我に返り、その場に起き上がろうとしたが負った傷が酷く痛む、少女はすぐにブラッドの身体を押さえ、横にすると少し怒ったのか

「まだ、起き上がらないでください！！傷口が開きます」

その会話を最後に互いに何も話さない、先に口を開いたのはブラッド

「…俺は…ブラッド……」

「私はシルヴィアといいます…まあ本当の名前は忘れましたけど…」
「…本当の…名前…」

シルヴィアと名乗った少女は下をうつむくと、少し寂しそうに口を開く

「私、お母さんに売られたんです…だから本当の名前は忘れました。シルヴィアって名前は、仲が良かったお兄さんがつけてくれた名前です、そんなお兄さんも私を裏切って…逃げてしまいましたけど」

ブラッドはシルヴィアの手につけられた手枷を見て察した、彼女は奴隷で逃げてる途中である事に、そして腕についたアザは、多分だが逃げた兄の責任を負わせて、叩かれた跡だろうと、シルヴィア自身はそこまで話す事はなかったが、だいたいそんな所だろう。

「すいません、こんな話し聞いても困っちゃいますよね…」

無理に笑顔を作るシルヴィア、ふとブラッドの右手に目が止まる。

「その手の刺青…」

「これは…過去に犯した罪…決して消せない…」

ふとブラッドの目に燃える焰が目入る、ゆっくりと起き上がると、いきなり焰の中でくずぶる木の枝を取り出し、自分の右手の甲に焼き付ける、肉の焦げる臭いが広がる。

「何してるんですか！」

すぐに燃える木の枝を、ブラッドから取り上げる、右手の甲を抑えながらブラッドは無言のまま

「すぐに冷やしてください、考えられ…」

ブラッドはシルヴィアを抱きしめる、いきなりの行動であったが、シルヴィアは黙って受け入れる、身体の震えるが伝わる。

ブラッドの頬を一筋の水が流れる、ずっと我慢していた感情が限界を超えてしまった。

それから4日

「じゃあ、また明日来ますね」

「待って、ちょっと手出して」

持っていたナイフを器用に使い、シルヴィアの手枷を外す

「これで、自由の身だ」

「…」

そう言うと、今度は自分の首にかけてた、星型のペンダントを外すと、シルヴィアの首にかける

「これ…」

「助けてくれたお礼…」

「…これ彼方の大事な物なんじゃあ…」

「…持っていてくれないか…」

翌日

いつも通り、川辺にやってきたシルヴィアだが…そこにはブラツドの姿はもう無かった。

それから5年の月日が流れる…。

第6話『隠した心…』

路地裏をゆっくりとした足取りで進むシルヴィアの前に、木の板で封鎖された入口が立ち塞がるが、すでに誰かが入ったらしい痕跡が残る、扉に手をかけると腐っていたのか、扉はそのまま奥側に倒れる。

ボタン

思わず口に手を当て、辺りを見渡すが誰にも見られていない事を確認すると、何事も無かったように装い先に進む、空の光はここには届かない場所らしく暗い、少し進むとそこは行き止まりになっていた。

「ここにはいないみたい…戻ろう」

そう言って後ろを振り返った時だ、一体いつから後ろにいたのかそこには大柄の男が道を塞いでいる、男は口角を上げ薄気味悪く笑う、口から除く欠けた前歯が印象に残る。

シルヴィアは、後ろが行き止まりという事を忘れて下がるが壁にぶつかる、それを見て男は相変わらず、笑みを浮かべるその顔は獲物を見つけた獣の目

「こんな所で何してるんだ、かわいいお嬢さん」

「それ以上近づいたら大きな声を出すわ」

「そうかい、なら声が出せないようにしてやるよ」

男は体格に似合わず俊敏な動きで、シルヴィアの首に手をかけると力を入れ始める、男に少しでも打撃を与えようと足をバタつかせる

が、大したダメージにはならない、逆に男の逆鱗に触れるだけで、更に力が入り抵抗する事さえ許されない

（もう…だ…め…）

ずっと首にかかる力が弱まるのを感じると同時に男の手が離れる、地面に膝つき咳き込みながら、何がおこったのかとゆっくり顔を上げると、男はシルヴィアと同様に地面に膝つき悶えている、男は背中手に手をやり苦痛の表情を浮かべている。

一体何が起ったのを理解するのに時間は必要なかった、男の近くに転がる鞆を見て察する

「痛ってなあ、どこのどいつだ！でて来い」

男は立ち上がり辺りを見渡す、しかしどこにも人の姿はない。一通り見渡したのち再びシルヴィアの方を見ると、そこにはブラッドの姿がありその後ろにはシルヴィアがいる。

「テメーか、俺様にケンカ売ってきたのは！ぶっ殺してやる」

殴りかかってきた男の右腕を軽々と掴み睨みつける、刺すような冷たい視線に、思わず男の額を一筋の汗が流れ落ちる、表情は何か恐ろしい物でも見たような恐怖の顔になる。ブラッドは男の手を放すや持っていた剣を向けると、少し低い声で

「失せろ…」

計り知れない恐怖を感じた男は、先程までの威勢はどこへいったのか、一目散に逃げて行く。

「まったく…」

ブラッドは溜息を吐きながら近くに転がる剣の鞘を取り上げるや、慣れた手つきで剣を鞘に収めると布で包み込むと、再び大きな溜息を吐きだし、ゆっくりとシルヴィアの方に身体の向きを変えると、彼女の前にしゃがみ込み心配そうな顔で一言

「大丈夫か？」

シルヴィアは小さく頷くだけで、それ以上は何も言わないままブラッドの手を取り立ち上がる。会話がないまま来た道に戻る2人、すこし間隔を空けて歩くシルヴィアはじつとブラッドの背中を見つめるが、ブラッドは一度も振り返る事なく

最初にいた広場に戻る。

「あの、ここまでで大丈夫です…あとは1人で帰れますから、ありがとうございます。私…シルヴィアといいます、今日の夜にこの広場で歌を歌うんで、よかったら聞きにきてください、えっと」

「ああ…俺は、ベン」

「ベンさんね、覚えておくわ」

ブラッドが偽名を使ったのにも関わらず、シルヴィアは顔色一つ変えないで軽く会釈すると、その場を去って行く、去り行くシルヴィアの姿を見送りながら

「ゴメン…巻き込む訳にはいかないんだ…シルヴィア」

その夜、千年祭の町の最後のイベントが始まろうとしていた。

最果ての町として特に目立った物があるわけではなく、ましてや有名人の出身地であるわけではなく、ただ荒くれ者達がギルドに集まり、酒を飲み交わすくらいしか楽しみがないこの町に、美しい歌姫がやってきてお祭りを祝す為にきたのだから、その盛り上がりようは尋常じゃない。

この町にやってきた美声を持つ歌姫の歌声を聴こうと、各方面からやって来た人に町の人達が歌姫シルヴィアの歌に酔いしれる、ステージから随分と離れたベンチに座り、その歌声を聴くブラッドの姿はどこか昔を懐かしむような表情、5年前とはまるで別人のように美しくなった彼女と違い、自分はその時と何一つ変わらない姿のまま、それが無償に腹が立って仕方ない、しかし運命を変えることはできないのも真実だからだ。

「神様は時として人に罰を与える…しかしそれは試練の1つとして人間に与えるもの…か」

あの日の出来事を決して忘れた事はなかった、忘れたくても忘れられない過去の過ち、ブラッドは右手の甲を見つめる、焼き潰したところで消える事のない呪いの象徴、まるであざ笑うかのように訴えかける、そうして自分を責めてずっと今まで生きてきたのだから、この先も同じなんであろう、自分に関わる者は決して幸せにはなら

ない、自分は死神と呼ばれた男であり、愛した女1人も守れない弱い男

「俺は…どうすればいい」

（全てを破壊すればいいじゃないか）

「くっ…またか…」

突然、胸に強い痛みを覚え強く抑え込むブラッド、痛みは少し時間が立つと収まるのだが、今日はいつもと違っていた、苦しそうな表情を浮かべる彼の元へと近づいてくる者が1人

「無様な姿ね、赤い死神のブラッド」

「お前は…」

布に巻いて隠した剣に手を伸ばしたが、相手が戦うつもりが無いのを察するとその手を止める、街灯があたらない場所に立ち、周りの者達に姿を見られたくないのか、そこから一步も動かない人物は用件だけを伝える

「これは忠告よ、次にあったときは全力で破壊するわ、貴方もあの子もね」

「もしもあいつに手を出して見ろ、身体があると思うな…」

「随分と苦しそうだけど、まだ自身の身体に起っている異変には気が付いてないようね、まあそのうちに思い知るはずよ、その時が楽しみだわ」

その言葉を言い終わるや、すっと消える。

第7話『内に潜む魔の力』

人々の歓声の中、シルヴィアは自分の歌を聞きに来てくれた人々に深く頭を下げる、周りを見渡すと彼女の目に、この場所から離れた所にいるブラッドを確認する、しかし少し様子がおかしいのを感じると、もう一度頭を下げてステージから降り、彼の居る場所へと走り出す。走る途中で祭りの最後の目玉である、花火が上がり始まる中、今のシルヴィアには花火などなんの興味もない、ただあるのは目の前にいる男の存在だけが全て、しかし立ちはだかる障害の出現、先程まで晴れていた星空は黒い影により隠される、それは雲ではなく、魔物の姿

「ひゃひゃひゃ：今日はとんだご馳走にありつけたもんだぜ、お前達：餌の時間だ」

上空に姿を現した黒い塊は散り散りになり空いっぱい広がる、かなりの数のガーゴイルの群れが姿を現す、祭りで集まった人間の臭いを嗅ぎ付け集まってきた。

「どうやら俺達の仕事みたいだぜ野郎共、掃除の時間だ」

ギルドマスターは煙草をくわえ火を着けると、懐からおもむろに銃を取り出すと、狙いを定め上空のガーゴイルに引き金を引く、音と同時にガーゴイルの引きつった断末魔が空に広がるのを、戦いの合図として戦闘態勢に入る。

一見すると、敵の数が多いが、この町のギルド登録の人間は腕の良い者ばかり、これくらいの魔物相手にはビクともしない、しかし数が通常と比べて多すぎるのが勝敗の分かれ目になる。

ブラッドの元へと走るシルヴィアの前にガーゴイルが着地する、そして彼女を取り囲むように降り立つ、完全に逃げ場を失った彼女に響く声

「シルヴィア、しゃがめ！」

言葉を合図にその場にしゃがみこむシルヴィア、頭の上を一陣の風が吹き抜けると、周りを取り囲んだガーゴイル共は身体半分が切り離されて、ドミノ倒しの様に倒れる、目の前に広がる血の海に思わず口を押さえる、生まれて初めて見る光景に言葉を失う、そこへブラッドが駆け寄ると彼女の手を取る

「ここは危険だから行くぞ」

彼女の手を引きながら走り出し、先程ブーメランの様にして投げた剣を拾いあげ、広場から南に向かったギルドへ向かう、走る間もブラッドの様子がおかしい事を気にするシルヴィアだが、黙って手を引かれ走る、その途中も遅い来る魔物共を倒して進む。

ギルドにたどり着くと、そのまま裏口に回り込みドアノブに手を伸ばし、扉を開けると中には女・子供の姿

「ここで、戦いが終わるまで隠れてるんだ…いいなここから絶対に出るな」

「待ってブラッド」

シルヴィアの言葉も聞かないままブラッドは駆け出す、決して後ろを振り返る事無く、戦いへと行ってしまおう、残されたシルヴィアは言いかけた言葉を言えずに、その場に立ち尽くし事しか出来ず。

ブラッドは裏口の横にあるもう一つの扉を開け放つ、地下へと続く階段を下りて鉄の扉を開ける、扉の向こうにある部屋の内部には、部屋一面に置かれた数々の武器の数々、暗い部屋を明かりも無く一番奥に進む、そしてある箱の前で立ち止まる、箱には何重にも鎖が巻かれている。

「…どんなに恐れられようと構わない、俺1人の犠牲でこの町を守る事が出来るのであれば…」

鎖に手をかける。

「死神に戻る覚悟は出来てる」

箱に掛かった鎖を剣で切り落とし、蓋を外すとそこにはあの日魔王を殺した折れた真っ赤な大鎌が保管されていた、過去の象徴と呼べる代物に再び手をかける、それは過去に戻る為でなく未来に進む為に、乗り越えるべく試練、あの感覚が再び戻ってくるのを感じる事ができる、戦いだけの日々に生きた過去

広場ではギルドのメンバーが最後の砦を守るべく奮闘しているが、圧倒的に数が多いのは認めざる得ない、こちらもそれなりの痛手を負っている、もう長くは戦えない状況に追い込まれているのは、間違いない

「マスター…そろそろ限界だよ」

「あと少し待て、死神が来るまで持ちこたえろお前ら」

「死神って…」

「聞いたことあるだろう、赤い死神の存在をよ」

マスターは不適な笑みを浮かべる、相棒達は顔を見合わせまさかという顔をする

「いいか、お前らこの先何が起ころうが、瞬きしないでしっかりとその目に焼き付けておけ、赤い死神の戦いをな、今日が見納めだ。」

そこに、姿を見せたのは真っ赤な大鎌を片手で軽々と持ち、歩いてくるブラッドの姿がそこにはある、その瞳はあの冷たい眼差し、マスターも含めた全員が凍りつく、普段のブラッドを見ているからこそその恐怖感が増す。

普通の人は知らないだろうがギルドの間では結構な噂になっていた、ギルド仕事で一度だけ見かけた者がいて、その戦いぶりをみたからこそ語れる恐怖と戦いかた、相手の息の根が止まるまで破壊し続ける、その死神と呼ばれた男が今日の前にいるのだから、固ずを呑んで見守る以外に道はない、マスターでさえ彼の本当の力がどれ程のものかは知らない。

ガーゴイル達も馬鹿ではない、ブラッドの持つ鎌を見た瞬間に攻撃の手を休める、ブラッドは数多い敵に対して相変わらず無表情のまま、目の前にいる敵だけを見るその眼中にマスター達の姿はない。

「はん、まさか生きていたとは噂には聞いていただ、こんな若造とは笑わせてくれる」

「バラバラにされたくないなら、俺の前から失せろ」

いつもと少し違う口調のブラッド、あの感覚は確実に彼の身体を蝕む、長く戦えば戦う程自分を見失う

戦いの感覚、あの日シルヴィアとあってから鎌を手放した、あれは

所詮魔王から与えられた武器であり、闇に全てを支配されるのは間違いない、自分が正気で居られるのはもって10分がいいところだった。

いつかこんな日が来た時のために、ブラッドはマスターにもしもの時は俺を殺してくれと伝える。

隠された自分の秘密を唯一知る人物で、絶対の信頼を寄せる者だからこそお願い…

『もしも、俺に何かあった時はこの鎌で俺の首を刎ねて欲しい…それしか方法はないと思ってる、この鎌は沢山の血を吸い過ぎてる』

それが彼とマスターが交わした約束

「バラバラにされるのはお前だ、死神」

ガーゴイル達は束になって向かっていく

「無茶だあんな数相手に勝てる分けない」

だが、相手が悪かった。

相手がどんなに束になって襲い掛かった所で所詮は雑魚、死神と呼ばれた男にとっては数は問題ではない、上空からの奇襲攻撃も軽々と避け、向かってくるガーゴイルを次々と倒していく、というよりも破壊していく、身体の一部も残さずにバラバラにしていってその姿は死神を超える、例え武器が折れていてもこれほどの戦いぶりを見せ付けられると、言葉が出てこない。

目の前で繰り広げられる地獄絵図、女・子供を避難させたのはこの戦いを見せない為にも含まれる。

「マスター：あれ本当にブラッドだよな」

「ああ、そうだ：俺も初めて見るあんな戦いは」

時計に目をやるマスター、戦いが始まりそろそろ10分になる、残る敵はガーゴイルのボス1体のみ、その体は通常サイズよりも格段にでかい

「噂には聞いていたが、本当みたいだな赤い死神、魔王様を殺して人間の仲間入りとはな、落ちたもんだな：だが安心しろお前は俺様の手で冥界に送ってやる」

「無駄口叩く暇があるなら、自分の命の心配したらどうだ」

「何だと」

巨大な鎌の刃はガーゴイルの脳天から振り落ちる、頭から振り下ろされた鎌は身体を真っ二つに裂く、空に響く奇妙な叫び声は、そう長くは続かずに最後の一撃と共に灰となり消えうせる。

全ての敵を倒して静まり返る広場、固ずを呑んで戦いを見ていた者達の緊張が解け、ほっと肩の力を抜き1人がブラッドの元へ行こうとした時だ。

「行くな！」

マスターがそれを静止する、足を止めマスターを見るとその表情は恐れていた事が起った事を察した、仲間達を一通り見てマスターは小さな声で

「いいか、俺が合図したらここから逃げろ」

「何言っただマスターを置いていけるかよ」

「いいから、俺の言う事を聞け：最悪の事態が起ってるんだ、俺の言う事を聞け…」

こちらにゆっくりとした足取りで向かってくるブラッドだが、その瞳の色は赤から紫に変わり侵食が始まった事を物語る、もう彼の瞳に映るのは敵のみ

「ブラッド」

マスター達の横をすり抜け、彼等をかばう様にブラッドの前に立ちふさがるシルヴィアの姿、誰も予想していなかっただけに、マスターも合図を忘れ

「何で来たんだ、早く逃げろ！今のあいつは危険なんだよ、誰も止められない」

「私は、彼を信じる」

その言葉を言い終わるや、シルヴィアはブラッドに向かって走り出す、今のブラッドにとって所詮は敵にしか見えない、鎌を振るうが微かにブレが生じ攻撃は当たらず、しかし鎌の先端が避けたシルヴィアの長い髪を切り落とす、地面に落ちるシルヴィアの艶のある髪の毛が風で飛んでゆく。一步間違えれば死ぬかもしれないのに、シルヴィアは決して引かない

「もうやめて、貴方は死神なんかじゃない」

その言葉を聴いた瞬間、異変が起り始める。持っていた鎌が手から離れ落ち、頭を押さえるブラッド

「俺の中に…入って…くるな」

その隙について、シルヴィアはブラッドの元へ走り強く抱きしめる。

「お願いだから帰ってきてブラッド」

「……シル……ヴィ……ア……ごめん」

その言葉を言い終わらない内に気を失うブラッド

地面に転がった大鎌は砂となり消える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531z/>

不死の騎士と歌姫が、夢見た世界の果て…

2011年12月19日13時49分発行